

児童文化学から子ども社会学へ

山田富秋

私はここで編集委員会から与えられたテーマについて、子ども社会学会誕生の遠因となったと思われるエピソードを紹介することにする。すでに学会発足から15年も経ち、発足当時のことは秘話になりつつある。私はこのまま秘話にとどめておくべきではないかと迷ったが、正確さよりも私自身の記憶を優先して、差し障りのない範囲で書き始めることにしよう。

私は1990年当時、公立大学では「児童文化学科」を唯一有する山口女子大学文学部に勤務していた。おぼろげな記憶をたどれば、当時のコースはタルコット・パーソンズがハーバード大学に創立した人間関係学科に倣って、文化コース、社会コース、心理コース、そして教育コースの4専攻から成っていた。パーソンズが人間についての総合理論を目指したのと同様に、児童文化学科は児童の総合的な理解を目指した。ところがその中核となるべき「児童文化学」は、川勝泰介氏の先駆的な努力にもかかわらず、まだ明確な輪郭を持っていなかったと言うべきであろう（後の『児童文化学研究序説』千手閣,1999年参照）。というのも当学科は、従来の児童文化学にあきたらず、パーソンズに触発された総合科学として、子どもという存在を人文諸科学の英知をもって多角的に明らかにすることを目指したからである。

こうして、この児童文化学科は児童文学はもちろん、発達心理学、臨床心理学、社会学、人類学(民俗学)、教育学、運動生理学等々の学問を領域横断的に擁することになった。学科主催で定期的にかれる研究会において、児童文化とは何かをめぐって、結論の出ない議論を積み重ねたことがなつかしく思い出される。それは一方では未知の分野に挑戦する喜びを生み出したが、他方では終着点の見えない徒労感も伴う経験であった。そのうち、日本全国の大学に時代の潮流に乗った学部改組や新学部創設の動きが目立ってくることになる。教員の幼少免の課程認定を受けていた本学科は、実質的には教員養成を主な営みとすることで存続の意味を保持していたが、この流れに抗することはできなかった。こうして、学科内に児童文化学科を維持するにしても、何らかの形で新しく意味づけ直すか、あるいは別な学部改組するか、それを調査するワーキンググループを発足させることになった。

私は児童文化学の将来的可能性について調査するワーキンググループに配属されて、かねてから研究会でつながりのあった持田良和氏にこういった調査の可能性を打診することになる。持田氏は龍谷大学の亀山佳明氏の主催する「社会化論研究会」に私と当時同僚であった松本健義氏を招き入れることになる。この研究会は、細辻恵子氏や麻生武氏を始め、多くの子ども文化研究者との出会いの場を設けてくれた。振り返ってみれば、この会に参加したことは、私の子ども研究にとって非常に貴重な経験であり、この機会に恵まれたことは感謝しても、し尽くせないだろう。

ところが時代は、大きく変動する。すなわち、1990年代初頭に高齢者のゴールドプランが実施に移され、福祉が日本の中心的な課題となる。かくて私たちの提出した児童文化の存続案は否決され、文学部は社会福祉学部と国際文化学部の二つの学部で改組されることになる。実際には1993年にこの二つの学部が発足するが、児童文化学科廃止が決まった時に、最後の記念として、本田和子氏はもちろん、つぎつぎと高名な子ども研究者を集中講義にお呼びすることになる。そのトップバッターは故藤本浩之輔氏であり、その翌年が片岡徳雄氏だったように記憶している。私は集中講義のあいだや講義終了後に、児童文化とは何か、子どもが創造する文化をどのように捉えたらよいのか、両先生に問いかけたように記憶している。そして子どもを中心的な研究テーマとする学会の必要性を訴えると、それに大きく頷かれ、両先生ともすぐに実行に移すことを約束していただいた。

ここから舞台は1993年に日本女子大学で開かれた第45回日本教育社会学会大会のラウンド・テーブルの場に移り、子ども社会学会設立への機運が一気に高まることになる。私のこのエピソードは確かに秘話にしておくべきだったかもしれない。だが、公立で唯一の児童文化学科が廃止され、それが日本子ども社会学会発足のきっかけのひとつになったとすれば、一種の感慨を覚える。翌1994年に京都大学で開催された発足大会の時に、大会実行委員長であった故藤本浩之輔先生の示された温かい気遣いを忘れることができない。